

## 追悼録

### 宮嶋 弘氏追憶

岡崎 望久太郎

さき以後藤丹治氏が急逝し、また宮嶋弘氏  
がなくなつた。身辺が急に寂しくなつた感じ  
である。しかし宮嶋氏の場合にはその逝去は

不吉な事ではあるが何か予期されていたよう  
でもある。私には彼の病氣もその治療法も納  
得できなかつた。緩慢な自殺のように思えて

ならなかつた。身近く見て見ているのが、つ  
らくてつらくてならなかつた。彼は頑固に近  
代医学を拒否し続けた。近代の營養学も信じ  
なかつた。塩も砂糖もとらなかつた。肉はもち  
ろんである。カロリー計算などということも滑  
稽な近代のさかしらであつた。柿茶をちびり  
ちびり飲み、生水の靈力の信仰者であつた。

はじめランチを一緒にとつた時、それを水で  
洗つて食べたのに驚ろいて以来、彼の独特の  
營養学を知つたわけだが、それは多く西式健  
康法に由来するものであつた。

その結果、というと彼も西式の信奉者も納  
得しないであらうが、昭和卅一年頃、栄養失  
調に陥つてしまつた。もちろんもう食物に何  
一つ不自由のない時代であつた。ところがそ  
れ以後彼の独特の治療法と健康法とは一層強  
く頑固に守り続けられ、それが十分になされ  
ていないから病氣になつたと信じられた。西  
式医学に対する信仰と実践の不足が病氣の原  
因であつた。

ほとんど喧嘩のような格構で、病院に入る  
ことを約束させた。そしてむつかしい入院  
の条件を森本君が色々と手配してくれたが、  
いよいよ明日入院するという夜、妹さんが見  
えて、やはり入院はしないと告げられた。そ  
のときは本当にがっかりした。がっかりする  
というより腹立たしかつた。いなむしろ、そ  
の頑固さに敬服した。私はいらだたしい気持  
で諦め、敬服した。しかしすぐ結核を並発し、  
この時は漸くストレプトマイシンの注射をし  
た。生れて始めての注射の経験で、そのあま  
り痛くなかつたことを語る口調は明るかつ  
た。しかし病氣がやゝ小康を呈するとすぐ近  
代医学、とくに手術と注射に対する不信は甦  
つた。營養学もむろん愚昧の体系にすぎな

つた。一体どうしてこういう信念が宮嶋さん  
の中にできあがつたのか。私はほとんど理解  
することができなかつたし、今も出来ない。  
死の三週間ほど前、断食療法をやつたらしい  
が、あのやせた身体で何故そういう方法をと  
らねばならなかつただらうか。

奥さんを死なせ、兄弟の方々は義絶同様  
になり、まつたく天涯孤独のような状態で、  
学問上の友人も遠ざけ、病氣がちないかにも  
寂しい生涯であつた。しかし晩年彼の治療方  
針にさかろうことのない人を得て、その腕に  
抱かれてなくなつたのは、せめてもの幸福で  
あつたらうか。

かれの孤独な魂がひそかに寄せていた信頼  
は橋本循先生と三木幸信氏にたいするもの  
ではなかつたか。内気な彼はそれもほとんど  
吐露することはなかつたらう。誰をも信用し  
なかつた彼はこの御二人に対してだけは感謝  
のこころをこころの奥深く秘めていたよう  
に、私には推察される。これもありがたい幸  
福であつたらうか。ああ。十一月五日

(本学教授)